

知的な気づきを大切にしている指導のあり方を探る

- 単元指導計画の作成を通して -

新 倉 美和子¹

子どもは対象とかかわる中で様々なことに気づいている。それを知的なものへと高めるためには、その価値を見だし子どもに返すなどの教師のかかわりが重要であると考えた。そこで「知的な気づき」の意味を理解するとともに指導計画を工夫して作成することを通して、生活科の学習指導のあり方を探った。

はじめに

生活科の創設において、具体的な活動や体験を重視し遊びも学習であるとする考えや子どもが主体的に活動するために教師は支援者であるという考えが出され、教師が知識を与え子どもが覚えるという教師主導の伝統的な授業観の変革が求められた。

そして10年がたち、今回の学習指導要領の改訂にあたっては、「知的な気づきを大切にしている指導が行われるようにすること」が、改訂の基本方針として出された。この「知的な気づき」ということは、新たに言われるものである。そこでこの意味をとらえ直し、調査研究協力員とともに指導計画の作成を通して「知的な気づきを大切にしている指導」のあり方について明らかにし、生活科の学習指導について考えることとした。

研究内容

1 知的な気づき

「知的な気づき」を明確にとらえるために、創設の時の考え方と比較することにした。

「小学校学習指導要領解説生活編(平成11年)」では「知的な気づき」について次のように示している。

- ・ 児童が自らの思いや願いをもって取り組んだ活動や体験を通して実感を伴って得られた気づきを指す (文部省 1999 p.62)
- ・ 児童が見付けた事物や現象についての直感的な特徴付けやアイデア、比較や関係付けを行って得られた考え方を、自らの論理としてそれぞれの児童が進んで言い表すところのもの (文部省 1999 p.63)

そして、教師は、この「知的な気づき」に注目し価値を理解し、子どもに尋ね返したり問い返したりなど対話をし子どもの思いに共感することが重要であるとしている。

これに対して「小学校指導書生活編(平成元年)」で

1 人材育成課 研修指導主事(兼)指導主事

は「気づき」を次のように示している。

- ・ 情緒的なかかわりとしての感動と驚きというのは(中略)そこには既に知的認識の芽生えが見られる。(文部省 1989 p.59)
- ・ 様々な知的な工夫や関心、あるいは気づきが認識の芽である(文部省 1989 p.60)
- ・ 生活科においては活動を通して新たな認識の芽を育てることが求められている。(文部省 1989 p.60)
- ・ 体を動かすことによって知的な活発さを引き起こすことが大切である。(文部省 1989 p.57)
- ・ (定着させるために)児童自身がもっている知識との比較や照合、あるいは関係付けが必要である。(文部省 1989 p.60)

このとき言われている「気づき」も知的なものを含んでいるとしており、活動を通して引き出すことや育てることを求めている。

そして、生活科の学習指導における教師の役割として無藤(1990)は次のように指摘している。

子どもが興味をもち、驚き、感動する、そういった瞬間を何とかして導き出すこと、(中略)子どもがそこから何か気づいたことがあれば、それに言葉を与え、あるいは別の形で表現するように導くこと、そして、それをさらに様々な形で広げていくこと

このように改訂前も「気づき」を大切にすることは求められており、「知的な気づきを大切にしている指導」は、新たな指導のあり方とは言えない。このことは、吉田と嶋野との対談(1999)の中で「気づきはそもそも知的なものを含んでいるもの」「価値づけた言い方」と確認していることである。嶋野は、今「知的な気づき」が注目されるのは、「教師の意識、認識の問題」(嶋野・吉田1999)としている。

教師の指導のあり方が問われているのである。

2 単元指導計画の作成と授業実践

(1) これまでの実践から分かること

実践を見直し、秋の校庭で見つけたものを紹介し合う場面での指導から、その問題点を探ることにした。

『秋と遊ぼう』(平成9年10月)

虫を見つけた子がおり、教師が「他に虫を見つけた人はいるか。」と他の子どもたちに投げかけたので、カタツムリを見つけた子が勢いよく手を挙げ教師に見せた。そこで教師は一旦はそのカタツムリを手取るが「他に見つけた人は？」と言いながら、すぐに返してしまう。そして、この後、この児童は意欲は無くして探すことをやめてしまった。

この指導では、子どもの発見が生かされていない。ここでは「どこで見つけたの？」など問い返し、「どんなカタツムリ？」と他の子どもと一緒によく見るなどして、見つけたことのよさを認める教師のかかわりが大切であった。しかし、カタツムリを見つけたことに対して、何も返すことができなかったのである。これは、指導の見通しがなくこの発見の価値を見いだせなかったからである。活動は取り上げるが次にどのようなかかわりがあればよいのか見えていなかったのだ。目標が明確で指導の見通しをもっていたならば、教師は的確な指導ができたのだと考えた。

(2) 単元指導計画の作成

子どもの気づきを予想しそれに対する教師のかかわりを指導計画に位置づけていくことにより気づきを見取ることが可能となり的確な指導をすることができるのではないかと考え、指導計画を工夫することにした。

ア 平成13年度の取組

調査研究協力員とともに、1学年『秋を楽しもう』2校、『秋のおぎのを探検だ』『秋さがし』の単元指導計画を作成し、指導計画と知的な気づきを大切にしている指導のあり方を検証した。(第1表)

知的な気づきを大切にす手だて

- * 活動における気づきを予想し、それに対して見通しをもって指導できるようにする。
- * 予想される気づきを促すことができるように、子どもへの働きかけを予想する。

(第1表)

授業の中でとらえた子どもの気づきを記録し考察した。

『秋を楽しもう』・『秋さがし』での記録

- ・ くつつき虫を見つけて服にくつつけて遊ぶ子に教師は、「歩いてもよくついでるね。」と声をかけると「わたしの服はボワボワだからくつつくんだよ。」と子どもなりの考えを伝えた。
- ・ 糸だけでどんぐりに糸を通そうとしていたので、それではできないことを伝え、「あっ、そうか。だから針なんだ。」と納得した。

活動を見過ごさず子どもの気づきをとらえることはできたが、活動はそこで途切れて連続、発展していかなかったのである。気づきを引き出すことだけに配慮した単元指導計画では不十分であることが分かった。

「これをしているとおもしろい」「もっとやってみよう」など自分なりの願いをもち、対象とかかわる中で気づき生まれ、その問題解決のために子どもは意欲的に取り組み、活動は連続・発展する。その過程で気づきはさらに確かなものとなっていくと考える。そのために、意欲的に取り組めるような学習の場や導入の設定、活動が連続、発展する展開の工夫や、学年の実態を考慮して2年間を見通した年間指導計画の作成が課題であることが明らかとなった。

また、協力員の感想に「気づきを見取ろうとする姿勢で授業に臨むが、その願いが強く出てしまい結果的に教師主導の活動に陥る」とあり、子どもの思いを大切にすることも忘れてはならないと改めて実感できた。

イ 平成14年度の取組

協力員とともに1学年『あそびにいこうよ』『秋とあそぼう』『私の家族』2学年『大きく育て』の単元指導計画・評価計画を作成した。(第2表)

知的な気づきを大切にす手だて

- * 育てたい力をより明確にし評価計画を作成する。
- * 具体的な活動の姿を予想し評価の視点として示す。それに対して、指導の留意点を考える。

今回、指導計画とともに評価計画を作成した。評価の視点をもって、実践し指導にあたったことにより、子どもの活動を具体的にとらえることができた。そして、つばやきや活動の中に価値を見だし、子どもに返すことができた。

授業の考察から、活動が連続し、子どもの意欲が高まっていくことをとらえることができた。

第1表 平成13年度に作成した単元指導計画の一例『秋を楽しもう』

	目標 主な活動	予想される気づき	気づきを促すための教師のかかわり
校庭の秋 見つけたよ	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 目標 ・校庭や身の回りの自然や暮らしの中から季節の移り変わりに気づくようにする。 </div> 身の回りで見られる季節の変化を発表しよう	服装の変化に気づく。 ・半袖から長袖になったこと。 ・半ズボンから長ズボンになったこと。 鳴いている虫が変わったことに気づく。 ・夏の昼間はセミ ・今は、暗くなって虫が鳴いている。 食べ物が変わったことに気づく。 ・果物(ブドウ・リンゴ・柿・ミカン) ・野菜(ササゲ・柿・ジャガイモ) 落ち葉や色づいた葉が増えたことに気づく。 ・1学期は草取り 桜の葉が茶色くなって落ちている。	・教室の中で変わったことから発言を求める。 ・家族や家の近くで発見したことを気軽に言えるように、日々のつづやきの中から季節を感じる発言を記録しておき、発表のきっかけにする。 ・食べ物にも目を向けられるように育てた野菜を収穫したことにふれる。

(ア) 授業記録『秋とあそぼう』からの考察 - 1

見つけたどんぐりを子どもからもらって大喜びしている担任とその子どもとのやりとりを聞いた後、

C しばらくして、「先生、どんぐりこっちにもあるよー。」「こっちこっち。」とひっぱっていく。

T 「どこどこ?」

C 「この木の下、ほら。」

T 「わあ、こんなところにあるなんて知らなかった。すごい、B君の大発見〜」

C 「先生にあげる。」と、ひろってくれた。

T 「ありがとう。」手に乗せて、さっきのと比べ「あれ、どっちがB君にもらったどんぐりだっけ。」

C 「こっちだよ。ほくのどんぐりのほうが、A君のより小さいもん。」

T 「ほんとだ。形も違うよ。」木の下をのぞいて拾う。「ここのどんぐり、みんなスマートで小さいね。」

C 「A君のどんぐりはどこにあったの。」

T 「行ってみよう。」走っていく。

C 「やっぱりこっちのどんぐりの方がでかいや。」

いくつかひろう。

T 「もっとさがそうぜ。」

友達と、どんぐりの木を探しに行った。

「こっちこっち。」と引っっぱっていく様子から、自分の発見を早く教師に見せたいことが分かる。このことを共感的に受けとめた教師のかかわりにより、この子どもは、見つける < 違いに気づく < 確かめる < もっと見つけようとする と対象へのかかわりを深めていくのである。計画の段階で、評価規準をもとに具体的な子どもの姿を想定した評価の視点とそれに対する指導の見通しをもっていたことで、教師は子どもの活動の中に価値を見いだすことができたのである。そして、それが的確な指導へとつながったと考えられる。

大きさの違いに目を向け、「もっとさがそうぜ。」と友達と探しに行く様子から、さらに新たな発見や気づきの深まりが予想される。気づきを大切にしながら活動をつなげ、継続的・長期的に活動を見取っていく教師のかかわりが重要である。

(第2表)

(イ) 授業記録『秋とあそぼう』からの考察 - 2

子どもの発想を大切にし解決のヒントを投げかけるようなかかわり方も必要である。

一人で夢中になって段ボールを張り合わせ、つなぎ終わってどんぐりを転がしてみたが、段ボールのつなぎ方がデコボコで、全然転がらない。

C 「先生、せっかく作ったのに、うまく転がってくれない。」とがっかりしていた。

T 「これ、使えないかな。」と、生活科室にあるラップの芯が入った箱をさしたした。

C 「あっ、できる。先生、ありがとう。もういいよ。」と、目を輝かせた。「任せてよ。」

翌日生活科室へ行くなり、夢中で2時間作り続け、段ボールにラップの芯の長いくねくねトンネルをはりつけたコースを作り、うれしそうにどんぐりを転がした。

C 「あーあ、先生、ここでどんぐりが止まっちゃう。」

T 「ここのカーブのつなぎ目のセロテープがべたべただから、どんぐりがはり付いちゃうんじゃない? 段ボールの切れ端でも、使えば〜」

C 「そうか。ほくは、そんなものはいりませんよー。」と、セロテープを反対向きに、中側からはり合わせた。「これなら、もう、べたべたじゃなくて、つるつるでしよー。」

「おや、どうして?」という小さな気づきや「もっと」という思いを大切にしなければならない。子どもが活動の見通しをもてない時には、そのことを見取り次につなげていくようなかかわりが必要である。その時に子どもが求めていることを的確に理解し、時を逸することなくかかわることは、主体的な活動を展開していく上で重要なことである。

「あっ、できる」「これなら、もう」の裏にはこの子なりの解決の方策が見えている。ここで、この気づきをより確かなものとするために、さらに教師が尋ね返したり、友だちに教えたりする活動を通すことが必要である。この子なりの論理が描かれるとともに、他から認められ自信となるのである。

このように指導計画を工夫したことにより、子どもの気づきを意識した指導をすることができた。活動の中で見取る姿が具体的に見通されていたことが的確な指導に結びついていると考える。そのためには評価計画の作成が有効であり、計画に基づいて評価しそれを指導に生かすという指導と評価の一体化を図った学習指導の展開が重要であることが確認できた。

また、気づきを質的に高めるための表現活動を大切にすべきことも分かった。

第2表 平成14年度に作成した単元指導計画の一例『秋とあそぼう』

小単元1 校庭や畑で秋を見つけよう (2時間)				
ねらい 校庭や畑など身の回りの自然の中から秋を見つけ、季節の変化に気づくことができる。				
主な活動 ・指導上の留意点		関心・意欲・態度	思考・表現	気づき
<p>外に出て、秋さがしをする</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもたちの生活の中のつばきから、秋さがしのきっかけ作りをする。 子どもたちの気づきに対しては、驚いたり、共感したりして、むやみに知識を押しつけないようにする。 何をしてもよいかわからない子には、畑や椎の木の下など、興味のありそうな場所に行き、一緒に探す。 秋さがしビンゴカードを用意し、休み時間や、帰宅後も、意欲的に秋をさがせるようにする。 <p>見つけた秋をカードに書く</p>	評価規準	<ul style="list-style-type: none"> 校庭や畑に出て、進んで秋を見つけようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 身の回りの季節の変化を見つけ、表現することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 校庭や畑の自然の様子の変化に気づいている。
	評価の視点	<ul style="list-style-type: none"> 校庭のあちこちに行って、秋を見つけようとする。 木の葉や木の実を集めようとする。 虫をさがそうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> どんぐりを見つめることができる。 落ち葉を拾うことができる。 見つけた秋を自分なりに表現する。 	<ul style="list-style-type: none"> いろいろな木の実があることに気づいている。 葉っぱの色の変化に気づいている。 コオロギやカマキリがいることに気づいている。 風が涼しいことに気づいている。

3 気づきを大切にする指導

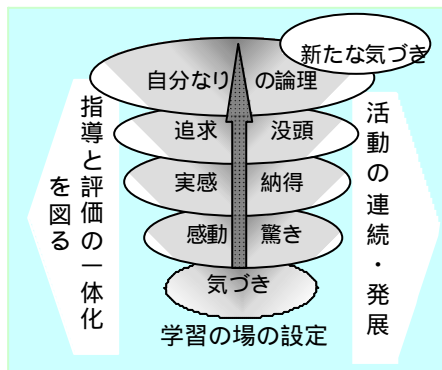
「気づきは純粋に知的なものであるとは限らない。(中略)感動や驚きと言った、その子どもの心の深みに根ざした何かと響き合うことが、質の高い気づきを生み出す」(無藤1996)という。単に活動させておくだけでは気づきは知的なものとして高まっていかないのである。活動の中でとらえた子どもの何気ない疑問や工夫などの気づきを育て質的に高めていくことが学習として大切である。

そのために、子どもが本気でしてみたいことがあり、進みたい方向をめざすような活動が望ましい。向かわせたい方向にむけて画一的な活動を展開しては生活科の学習は成り立たない。教師は対話等を通して子どもの声を聞き、活動をよく見て判断し、次の指導を見極め、教師のめざす所と子どもの思いをすりあわせて子どもとともに活動を展開するのである。このように生活科において指導と評価の一体化は重要である。

そして、活動が連続、発展し、自ら対象とのかかわりを深めていく中で気づきは高まると考える。活動の中で子どもなりの問題解決が図られ、実感をもった納得を得られるからである。子どもの「おや?」という何気ない気づきをとらえ、共感や問い返しによって子どもの意欲を喚起し、主体的な活動を引き出すことが重要である。その過程で子どもは新たな気づきと関係付けるなどしながら、自分なりの論理として確かなものにしていくのではないだろうか。教師の指導のあり方として、対象とのかかわりを深めていく場の設定や授業設計は重要なことであり、どのような力を育てたいのかを明確にもち、生活科の教科目標を理解し、内容を押さえておくことは不可欠である。(第1図)

何よりも「子どもたちの目線でつぶやきを聞き、一緒に活動するように心がける」(協力員の考察)という共感的な子どもの見方と、気づきを知的なものとしてとらえ価値を見いだして指導に生かすという指導性が教師には大切であると考えられる。

「生活科にあっては、活動をとおして新たな気付きを育てることが求められている。単に活動が楽しいとか、児童が生き生きとしていたということにとどまってはならない。」中野(1992)の言葉である。「知的な気づきを大切に
する指導」は、改めて生活科創設の際の理念をとらえ直し、よりよい学習のあり方をめざしていくことを求めているのである。



第1図 気づきの高まり

4 今後の課題

活動を通して新たな気づきを育てることが求められているが、本研究では、気づきを見取りそれに対する指導の方向性を示すにとどまっている。子どもの発見や気づきを知的なものとして高めていくためには、今後も研究を深めていかなければならない。子どもが自分なりに実感した気づきを確かなものとする表現活動やふり返り活動のあり方を明らかにする必要性を感じている。機器等の有効な活用方法も視野に入れながらこれからも生活科の授業づくりを考えていきたい。

おわりに

長期研修員の研究と関連を図り、調査研究協力員と意見を交換し資料を提供していただきながら研究を進め、単元指導計画の資料集をまとめることができた。

本研究にあたって、調査研究協力員の「一人ひとりの気づきを見取って、より深めるためにどんな支援をしたらよいか考えながら、精一杯子どもに返してきた。」という熱心な取組に、深く感謝申し上げる。

[平成13年度 調査研究協力員]

藤沢市立善行小学校	丸山 とみ
海老名市立大谷小学校	石橋 敬子
伊勢原市立竹園小学校	井山 貴代
厚木市立荻野小学校	中山 純子

[平成13年度 長期研修員]

湯河原町立吉浜小学校	三堀 仁
------------	------

[平成14年度 調査研究協力員]

茅ヶ崎市立緑が浜小学校	島田起久子
海老名市立上星小学校	福元 佳鶴
平塚市立金目小学校	上原みち子
厚木市立鷲尾小学校	高橋 温子

[平成14年度 長期研修員]

二宮町立二宮小学校	府川 芳子
-----------	-------

引用文献

対談 嶋野道弘・吉田豊香1999

『生活科の授業をどう創るか』明治図書p.14-15
中野重人1992『生活科教育の理論と方法』東洋館出版
p.138

無藤隆1990『生活科の心理学』初教出版p.12

無藤隆1996「気づき」編集=中野重人/谷川彰英/無藤隆
『生活科事典』東京書籍p.63

文部省1999『小学校学習指導要領解説生活編』

文部省1989『小学校指導書生活編』

参考文献

加藤明1994『評価から見た生活科の指導』国土社

無藤隆2003「生活科の授業から始めるカリキュラムづくり」(日本生活科・総合的学習教育学会『せいかつ&そうごう』第10号)